

回想・音楽夢物語 ピアニスト 高野耀子の時代 (前編)

取材・文＝神保真子／上田泰史
Text＝Natsuko Jinbo/Yasushi Ueda

1954年に日本人として初めて国際音楽コンクールで優勝し、ヨーロッパを中心に国際的に活躍されたピアニストの高野耀子さん。多くの驚くべき出会いに恵まれたその若き日の思い出を、心の赴くままに語っていただきました。

7歳まで、日本語を話せなかった。手元に残る青春時代の日記帳も、フランス語で書かれたものばかりだ。画業を営む日本人の両親のもと、1931年にパリのモンパルナスで生まれた。父の高野三三男(1900～1979)はアール・デコ調の作風で知られる当時の売れっ子アーティストのひとり。画家仲間にはレオナルド・フジタの名で知られる藤田嗣治(1886～1968)らもいた。「親は日本に帰るなんて全然思っただけ。だから私に日本語なんか教えてなかったわけ」。

現在の住まいは都内の瀟洒な一軒家。父の残した元アトリエだ。「高野画伯令嬢」のレッテルは常に付きまとってきたが、「だから私日本に住みだくなかったのよ。結局、両親が亡くなってから日本に住むようになった。嫌じゃない、誰それの娘つての」。広い庭には緑が茂り、目の覚めるようなブルーの内壁には昔両親の絵画や思い出の音楽家たちの写真が飾られている。居間には2台のグランドピアノが並び、86歳の今も、生徒や海外の音楽家たちが頻りに訪れる。



ヴェロニクと高野耀子

ピアノとの出会い

ピアノを始めたきっかけは偶然だ。両親と住む集合住宅の廊下で遊んでいたところを、同じ階に住むピアノ教師から鉛筆を餌に勧誘された。半ばなじ崩し的に始まったレッスンでみるみる頭角を現したが、子供心には「何か気に食わないっていうんで」先生に反抗ばかりしていたという。本気でピアノに取り組むようになったのは、往年の名ピアニスト、マダタ・タリアフェロ(1893～1986)

とそのアシスタントのもとに移ってからだ。門下の「ちび」として可愛がられながら、身体をリラックスさせた自然な奏法や美しい音色、そして「聴く」ことの大切さを学んだ。知らず知らずのうちに身につけたこの「タリアフェロ・メソッド」は、その後ピアニストとして生きて行くうえで大切な基礎となった。

戦争、初めての日本

状況を一変させたのは、第二次世界大戦の勃発である。両親の出身国である日

本がドイツと手を組み、フランスの敵国となったのだ。ドイツ軍のパリ侵攻も間近にせまった1940年5月27日、高野一家や藤田嗣治らに乗せた客船「伏見丸」はマルセイユを出航し、7月7日に神戸に到着した。

それまで生粋のパリジエヌとして育ってきた少女にとって、日本は「初めての外国」。ひとり西洋風の革靴をはいて登校した小学校では、大騒動を巻き起こした。「いまから考えたら、あれイジメだったんだと思うけど、当時は、イジメととらえず、戦争ととったわけ。休み時間になると、私一人対学校中で大戦争やるの。私は日本語あんまりできないでしょ、口で答えられないじゃない、喧嘩。だから腕力でいくの」と笑う。結局、フランス系のミッション・スクールに転校した。

東京音楽学校へ

一方ピアノについては、若き日の安川(章蘭)加壽子(1922～1996)に7年間にわたって師事することとなった。安川もまた、幼少期からフランスの

音楽教育を受けて育ってきたパリシエンス。やはり戦争を機に、一足先に日本に戻ってきていた。のちに昭和期の日本を代表するピアノ教育者の一人となる安川だが、出会った当初は弱冠19歳。「私長い間ほんとに不満に思ってたの、なんにも教えてくれなかったつて。でも今から考えたら19歳の娘が何を教えられるの、つての。コンセルヴァトワール出て、17歳ぐらいから先生にも習ってなくて、日本に来ちゃったんだから……そりゃそうでしょ」。さらに戦時中は疎開等の事情もあり、レッスンどころかピアノの練習もままならない状況が続いていた。中学3年のときに上野の東京音楽学校（現在の東京藝術大学音楽学部）受験の意向を



幼女の着物

安川に申し出たところ、「無理無理無理！つて言われた。そりゃそうでしょ、あたりまえじゃない。ろくにピアノなんか2、3年弾いていないのに。でも入っちゃった（笑）」。歴代最年少での入学だった。「同級生は戦争から帰ってきた人なんかもあるから、30歳ぐらいの人もいるわけ。すごい面白いクラスだったの」。ピアノの園田高弘（1928〜2004）や作曲の黛敏郎（1929〜1997）、矢代秋雄（1929〜1976）、ホルンの千葉馨（1928〜2008）らと、学年や年齢の差を越えて親しく交流した。もともと、この頃の音楽学校では、男女が親しく寄り添って話をすることはこ法



伏見丸にて

高野耀子 Yoko Kauno (1931〜)
パリ生まれ。東京音楽学校を経てパリ国立高等音楽院修了、デトモルト音楽アカデミーでハンス・リヒター＝ハーザーに師事。1954年ヴァイオリン国際音楽コンクール第1位、1960年ミュンヘン国際音楽コンクール第4位。1965年よりA.B.ミミケランジエリに師事。1979年より日本に拠点を移し、演奏・教育活動を行う。

度。「（学校の近くの）国立博物館、当時
は帝室博物館ついていたんだけど、そこ
の裏門が開いてたの。だから、終戦まで
男女でお話したいときはそこで話して
たの」。

再びパリへ

音楽学校では楽しい時を過ごしたが、卒業を待たず1949年の夏に渡仏。コンセルヴァトワール（パリ国立高等音楽院）の入学年齢制限が迫っていたからだ。交付されたパスポートの番号はまだ400番台。海外渡航自体がきわめて困難な時代だった。「だって占領ですよ、アメリカの。お金のあてだつてないんだもの。そりゃそうですよ、大変ですよ」。

飛行艇で横浜から岩国を経由し、香港で一泊。バンコクで昼食をとつたが、「ここからおとく話なんです。私の隣の席に、すごいイケメンのイギリス人が乗ってきたの」。彼の名前はジョン・コイスト（1916〜1989）。のちにバヴァロツタイらを担当する有名音楽マネージャーとなる人物だ。「私英語出来なかったのよ、学校で習う程度でしか。向こうだつてフランス語は私の英語ぐらいしかできないのね。でも何か会話できたのよ」。長旅のうちに、すっかり意気投合した。このコイストとの出会いが、留學後に思ってもよらない幸運をもたらすことになるのだつた。【1】

（つづく）